



35

「断」

三五 ★ 断

断るというのは、なかなかつらい。

知人の舞台、友人の結婚式、気になつてゐるライブ。引き受けたい頼みごとなど、どれも参加したいだけに、断らなければいけないとわかると気が滅入つてしまつ。

行きたい予定というのは、なぜかカレンダーの空白ではなく、ぎゅうぎゅうのところに好んでやつてくる。「さすがにそこ被る?」と、あまりにピンポイントな重なり方をしたときは、思わず笑つてしまふほどだ。

行きたさでいうと圧倒的にそつちなのに、断らざるを得ない場合もある。たとえば、楽しいお誘いがあつたとして、そこに歯医者の予約が被つていた、など。

「そんのずらせばいいじゃん」と思うかもしれないけれど、案外それが難しい。なにせ身体はひとつなのだ。

断るときのメッセージにはいつも頭を悩まされる。「また別の機会にね」と添えるけれど、次の機会はなかなかやってこない。行きたい気持ちは本物なのに、それを伝える手段がない。

だからついつい、文章が長くなる。抑えて抑えて。言い訳のようで、言い訳ではない。そうだそうだ。そんなふうにメッセージを何度も書き直している。

「行きますー」の返事なら、びっくりマークマシマシで
すぐに書けるのに。

送信ボタンを押したあと、胸の奥になにかぽつんと残る
ものがある。行きたかったな、という気持ちだろう。

断ることで、まるで相手との距離ができるようを感じて
しまうのは、きっと気にしそうだ。
行けないからといって心まで離れていくわけじゃない。
むしろ、そういうときほど普段よりその人のことを思って
いる気がする。

今日もどこかで、大事な日を迎えている誰かがいる。
その人が笑顔だつたらいい。

そんなことを思いながら、歯を磨いて眠る。